

近世東国伝道の一考察

—性信前世遺骨譚—

南 條 了 瑛

一、研究の主眼と方法

宗教の伝道を実践的に考える際、教義や信仰と縁遠い者が、実際にその宗教と接する機会が存在しないと、当然伝道は成立しない。その観点からいえば、そもそも信仰と縁遠い者が、実際にその宗教と接する機会となり得る場として、宗教施設へ訪問する巡礼者や観光客に着目した「旅」に関する研究は重要である。これは、浄土真宗の伝道を考える上でも同じことがいえる。

旅について研究を進める際には、旅の持つ宗教的側面と観光的側面とを二者択一に論じるのではなく、両面がどう影響し合っているかを考察する方法が通例となりつつある。こうした宗教と観光（ツーリズム^①）との関係を考察する際に欠かせないのが、山中弘などが論じる「宗教ツーリズム」の視点である^②。これは、一九九〇年代以降に発展してきた比較的新しい学問である。岡本亮輔は、宗教学・宗教社会学における宗教と観光を取り扱う研究のことであると述べる^③。また門田岳久は、「宗教的巡礼が信仰の旅で、観光的ツーリズムが余暇・行楽の旅だという、宗教研究における従来の二分法を超越する研究^④」と述べる。これは、巡礼と観光が決して別々に存在するのではなく、双方が親和の関係にあるということである。さらに、観光目的の者には少なからず信仰心が存在し、一方、熱心な聖地巡礼者にも宗教的参詣に付随して観光を楽しむ側面を持ち、時に観光から信仰に志向することが指摘されてい

る。⁵⁾これは、観光客が信仰者になるという伝道的展開の可能性を多分に含むことを示唆している。そうであるならば、真宗伝道における旅の要素を考察するにあたり、宗教ツーリズム研究上での方法・射程に倣うかたちで進めなければなるまい。

さて、山中弘は、宗教とツーリズムをめぐる問題領域を概括的に以下の三つに整理している。⁶⁾

(1)「宗教思想とツーリズム」……宗教とツーリズム、両者の関わりを、その宗教思想(教義)との関連で考えるもの。
 (2)「巡礼(者)とツーリズム」……巡礼(ゲスト)と聖地(ホスト)二つの領域を分析的に切り出し、まず宗教的旅である巡礼を行う人々や巡礼路を焦点化し、ツーリズムとの関わりを論じるもの。

(3)「聖地とツーリズム」……巡礼者が向かう先である聖地などの宗教施設や歴史的遺産をめぐる生じる様々な問題を扱うもの。また、訪問者にとって聖地を魅力あるものとする役割を担う旅行会社、鉄道会社などの「プロデューサー」という媒介者や、さらに、世界遺産指定などの、社会的・文化的動向も考える必要がある。

こうした枠組みを念頭に置きながら、過去の真宗伝道事情をみると、真宗寺院訪問者の中には、旅する巡礼者や観光客が混在し、そこで念仏者が親鸞教義あるいは親鸞(一一七三～一二六三)という一人の宗教者を魅力的に語ることで、伝道が成立する場合が多くみられる。とりわけ旅が隆盛した近世の東国(とりわけ北関東)地域は、二十四輩寺院⁸⁾を取り巻く念仏者が語る親鸞やその門弟に関する「伝承」⁹⁾が、真宗信仰と縁遠かった旅人の心情を燦り、真宗と接する機会を得ている。

これは、先述した山中弘の問題領域でいえば、(3)に当てはまる。すなわち、近世の旅人(ゲスト)と、二十四輩寺院(ホスト)をめぐる生じる様々な問題を扱うにあたり、訪問者にとって寺院あるいは浄土真宗を魅力あるものとする役割を担う念仏者(プロデューサー)という媒介者の動向に着目することで、過去の実践的な真宗伝道の事例研究が可能となるのである。

そこで、本研究では、親鸞の直弟子の一人として、のちに二十四輩の第一とされた性信（一一八七～一二七五）に関する伝承を取り上げ、旅人（ゲスト）に対して、近世の念仏者（プロデューサー）が性信の伝承を語ることが、当時の布教伝道にどのような影響を及ぼしているのかを考察するものである。

真宗の伝承に関する研究については、塩谷菊美¹⁰、草野顕之¹¹の研究をはじめ、最新では、大澤純子が論じている。教団が正当な親鸞教義を提唱する一方で、現場での「語り」によって伝道場が持たれ、親鸞像が展開していくという点は、真宗のみならず宗祖像を考える際に重要だと考える視点である。末木文美士は、近代的な親鸞研究は、実証主義の方法を用いて大きな成果を上げた一方、伝説的な要素を排除し、信頼できる同時代の第一次史料に基づき、合理的な検討によつて歴史的事実を確定しようとする方法が、今日行き詰まりを見せていると指摘する¹³。

たしかに、近世東国における真宗伝承を一瞥すると、ときに親鸞教義から逸脱するものも少なくない。そのためか、真宗学において、伝承に関する先行研究がほとんど存在しない。これは、一見荒唐無稽な伝承を、単なる創り話として、研究対象の埒外に位置づけてきた歴史が想起される¹⁴。しかし、これからは、真宗や親鸞あるいはその門弟がいかに語られてきたか、その形成と成立過程を探る作業が、民衆と真宗とのリアルな関わり方を知る上で必要になってくると考えられる。

近世東国の真宗に関する伝承について、先駆的な研究をしているのは、今井雅晴である¹⁵。今井雅晴は、史実と伝承を峻別したうえで、歴史学の立場から東国での親鸞伝承を考察している。こうした親鸞がいかに語られてきたかについての研究は、今後は歴史学の立場からの考察のみにとどまるものではなく、より学際的に行うべきである。

以上の問題意識から、本研究では、近世東国の二十四輩寺院（ホスト）を取り巻く念仏者（プロデューサー）の語る性信の伝承を研究対象とし、旅人（ゲスト）にとつてどのような影響を及ぼしているか考察するものである。

さて、性信の遺徳が記録された近世の巡拝記の一つである、先啓（一七二〇～一七九七）著『大谷本願寺通紀』

巻第七には、次のような伝承が語られている。

建長二年七月、感^一夢告^二至^三奥州信夫郡土湯山^一、得^二前生骸骨^一、創^三寺其地^一、曰^二法得寺^一。

これは、性信が夢告によって自身の前世の遺骨を発見したという伝承である。先啓の『大谷遺跡録』は、初期真宗巡拝記の代表作として知られる『遺徳法輪集』などを参考に著したもので、著者が生涯をかけて著した当時の遺跡研究の集大成である。

本研究にて、いまいう性信の遺骨物語の意義を検討し、近世における東国伝道の重要な一端を探っていく。

二、性信の人物像

まず、性信という人物像を知り得る史料を確認しておく。

そもそも、性信在世の時代に書かれた性信に関する史料は、親鸞の手紙(消息)の他に目立ったものは存在しない。その多くは、親鸞の真筆ではなく、室町時代以降の版本ではあるが、その内容から、性信が当時の東国教団における重要人物の一人で、親鸞からの信頼が篤かったことが窺える。¹⁸⁾

性信という人物の詳細を知る手がかりとなるものは、主に近世の史料となる。真宗僧侶の人名に特化した辞典である柏原・蘭田・平松監修『真宗人名辞典』(法藏館、一九九九)をみると、「性信」項目の末尾には、「史：親鸞聖人御消息集、親鸞聖人血脈文集、大谷遺跡録二、二十四輩次第記録、遺徳法輪集五」¹⁹⁾とある。このことから、性信という人物を窺い知るためには、手紙(消息)を除けば、基本的には近世に書かれた史料が参考文献となっている。

近世の書物のなかには、右に挙げた史料以外に、性信という一人の宗教者に特化したものが、以下の通り存在す

る。

- ・「報恩寺開基性信上人伝記」(報恩寺所蔵)
- ・「性信上人縁起」(板倉町・宝福寺所蔵)
- ・「宝福寺縁起」(板倉町・宝福寺所蔵)
- ・「性信上人像伝記」(野木町・法得寺所蔵)
- ・「法得寺縁起甲」(野木町・法得寺所蔵)
- ・「法得寺縁起乙」(野木町・法得寺所蔵)

これらの史料については、今井雅晴が翻刻し、閲覧可能となっている。²⁰ この中で、性信の人物像について最も詳細に記してある史料が、報恩寺所蔵「報恩寺開基性信上人伝記」である。本史料は、上下二巻からなるものである。奥書によれば、性晴(一七〇四～一七六四)が作製したのを性実(一七一三～一七八三)が書写したとある。本文の右脇に読みの調子を示す朱点が、全文にわたって付されている。これは、性信の一代記を本書によって門徒に語り聞かせたものと考えられている。²¹ 本文は、上巻五段、下巻四段で構成されている。内容を、左図にまとめておく。

- 上巻第一段 性信の生い立ち情報から始まり、法然の仲介によって親鸞の弟子となる一段。
- 第二段 親鸞が常陸へ布教に赴く際、性信が付き添い、のちに報恩寺等を建立する一段。
- 第三段 親鸞より授かった「龍返し剣」にまつわる一段。
- 第四段 親鸞と性信の別れの場面。親鸞が京都へ帰洛し、性信へ宝物が付属される一段。
- 第五段 性信と翁との交渉が記され、「鯉魚の会」の成り立ちが記される一段。
- 下巻第一段 親鸞帰洛後、性信が京都で再会し東国の邪義について相談し、真影を付属する一段。
- 第二段 性信前世の遺骨にまつわる一段。

第三段 性信八十九歳、往生を描く一段。

第四段 真如尊師が性信前世の遺骨をみて「嗟呼、性信毛権者ナリト」と嘆ずる一段。

上巻第一段には、性信の生い立ちや、親鸞の弟子となるまでの情報がある。これによると、性信は、常陸国鹿島神宮の神主である大中臣氏の出身である。当時の神主は武士であり、その豪傑さと大雑把な性格から、悪五郎と呼ばれていたという。のち、法然の禅室を尋ねる際に、親鸞と出会う。親鸞は性信の志を感じ取り、親鸞の勧めによって性信は念仏者となり、親鸞第一の弟子となる経緯が記されている。ここでいう性信が親鸞の弟子となるまでの経緯は、他のほとんどの史料にも同様の記載があり、法然の仲介によって親鸞の弟子となったとみてよいだろう。続く第二段では、性信の建立する寺院が記してある。他の史料と併せて確認すると、性信が建立したとされる寺院は、報恩寺をはじめとし、聞光寺（報恩寺掛所）、法得寺、龍宮寺の四寺である。続く第三段、第四段、第五段、そして下巻第一段にわたり、親鸞より授かった「龍返しの劍」にまつわるエピソードや、性信と翁との交渉からなる「鯉魚の会」（現在、毎年一月に報恩寺にて開催する「廻開き」行事）の由来などが記してある。そして、下巻第二段から第三段にかけて、本研究で取り上げる性信前世の遺骨譚の内容となる。建長二（一二五〇）年、奥州信夫郡（現在の福島県）の土湯山に性信が向かい、自身の生前の骨を松の木の下から掘り出し、その地に堂を建立したのが法得寺の起源であるという。その後、建治元（一二七五）年、性信八十九歳にて往生したと伝えている。

ちなみに、のちに刊行した近世巡拝記の代表作として知られる宗誓（一六四五〜一七一八）の『遺徳法輪集』には、（性信が自身の前世遺骨を発見する物語が詳細に描かれたのち）性信房大二悦ヒコノ処ニ寺ヲ立テコ、ニモ梵筵ヲヒラカレ勸化比類ナクソアリケル、スナハチ法得寺トナツク

性信房建長二年ヨリ文永九年マテニ四ヶ寺ヲ建立セリ、相州鎌倉ノ法得寺上総国藻原ノ法得寺下野国小山荘佐河ノ法得寺コレナリ、今土湯山ノ法得寺ハ中古ヨリ臨濟宗トナレリ寺号モ改テ光徳寺トイヘリ^②

とある。「法得寺」という名の寺院は、土湯山の法得寺建立後の建長二（一二五〇）年から文永九（一二七二）年に至るまで、相州の鎌倉、上総国の藻原、下野国の小山荘佐河の各地に、法得寺を建立したという⁽²³⁾。また、右引用文の最後には、遺骨譚の舞台となる土湯山の法得寺は、のちの元和元（一六一五）年に臨濟宗妙心寺派の寺院となり、名前を「法得寺」改め「光徳寺」となっているという。現在、この寺院は、「興徳寺」という名称で、現在まで残っている。

三、遺骨譚の内容比較

本章で、性信が夢告によって自身の前世の遺骨を発見したという伝承について検討していく。遺骨物語が記されているものを整理すると、以下の史料となる（便宜上番号を付す）。

・江戸時代前期～中期

- ① 「性信上人像縁起」（野木町・法得寺所蔵）
 - ② 「報恩寺開基性信上人伝記」（報恩寺所蔵）
- ・江戸時代中期
- ③ 「性信上人縁起」（板倉町・宝福寺所蔵）
 - ④ 『遺徳法輪集』
- ・江戸時代後期
- ⑤ 『大谷遺跡録』
 - ⑥ 『大谷本願寺通紀』

⑦『二十四輩順拝図会』

右図の①から③については、前掲した今井雅晴の論文にその解説が述べてあり、④から⑦は、『真宗史料集成』第八巻に所収され、「解題」にその解説をみることが出来る。それらによると、まず、江戸時代前期に書かれたと推察されるものに、①野木町・法得寺所蔵「性信上人像縁起」がある。第二世住職潭空が建治元（一二七五）年、性信の没直後にまとめたものを、教運（一七四二〜一七五四）が写したもので、その字体から江戸時代前期から中期のものと判断されている。この教運という人物が、第二世住職潭空のまとめた性信伝記を正しく書写したとすれば、性信の遺骨譚が描かれる史料の中で最古のものとなる。次に古いと言われるのが、②報恩寺所蔵「報恩寺開基性信上人伝記」である。本書の奥書には、性晴（一七〇四〜一七六四）が作製したのを性実（一七一三〜一七八三）が書写したとあることから、江戸時代初期から中期のものとなる。③板倉町・宝福寺所蔵「性信上人縁起」は、近世中期の書写で、著者は不明だが、教学的内容が存在することから、真宗教義に精通した者が作ったと考えられている。

また、同じく江戸時代中期には、巡拝記（旅日記）の代表作として知られる宗誓著④『遺徳法輪集』がある。この『遺徳法輪集』以降、その特徴を次いで、先啓著⑤『大谷遺跡録』、玄智（一七三四〜一七九四）著の⑥『大谷本願寺通紀』、了貞（生没年不詳）著の⑦『二十四輩順拝図会』といった巡拝記が存在し、これらには全て性信遺骨譚が記してある。さて、性信遺骨譚を古い史料から順番に確認していく。まず、最古の史料と考えられる①野木町・法得寺所蔵「性信上人像縁起」には、以下のように述べている。

建長二年初秋の比、修行の志深くして性信房奥州へ趣給ひ、信夫郡に至るに、土湯山といふ高山あり、松風嶺を廻り、月猶寒き深山に分け入に、一人の獵師あり、性信房の曰、我前生の骨此松樹の下にあり、汝掘り出し我に与よと、獵師申けるは、不思議の事をのたまふものかな、然りといへとも、我は獵を与んとて、性信房弓

矢を取て彼岩下に至に、果して塵壺²⁵足先きに貫きたり、獵師奇異の思ひをなし、然は、仰に任すべしと、松樹の下を掘に、不思議や骨を得たり、性信房大に悦て、此処に一字建立して法得寺と号し、弘願念仏と^{云々}²⁶ここでは、性信の「修行の志」が強かったので、奥州信夫郡土湯山へ向かったことが示されている。その後、獵師との対話場面が描かれ、弓矢を用いた説得の後、獵師に樹の下を掘らせて、前世の骨を発見する旨が記されている。

つぎに、②報恩寺所蔵「報恩寺開基性信上人伝記」では、上下二巻あるうち、下巻第二段と第四段に遺骨の物語が出てくる。下巻第二段では、性信前世の遺骨譚の全容が記され、同第四段では、その遺骨をみた者が感動する場面が描かれる。その物語の描写を確認してみると、

忽然トシテ聖僧夢中ニ現ジテイハク、我上人ニ前生ノ骨ノ所在ヲ教ンガ、奥州信夫郡土湯山ノ麓²⁷ニとある。先ほどの①野木町・法得寺所蔵「性信上人像縁起」では、性信が土湯山まで行く動機が、「修行の志」が深かったからであるのに対し、報恩寺所蔵「報恩寺開基性信上人伝記」では、性信の夢の中に現れた「聖僧」のお告げが動機となっている。ここでいう「聖僧」とは、のちの史料にも出てくる「化僧」であり、仏・菩薩が衆生である性信をさとりに導くために、仮に僧侶のかたちとなって現れたものであろう。

③板倉町・宝福寺所蔵「性信上人縁起」は、真宗の専門用語を多用して、性信の伝記が記されている。文体をみると、作者は真面目で博学な学僧を想起させるが、そのなかに、前世遺骨譚が登場している。

建長二年秋七月、性信遊^フニ奥州信夫郡^ニ、一日到^リ土湯山^ニ、謂^テ侍者^ニ曰、此処^ニ有^リ我先生ノ骨^一、掘^レ之^ヲ而、掘^ル之^ニ、果^{シテ}得^レ之^ヲ、其地立^テ、伽藍^ヲ一^ノ号^スニ法得寺^ト、²⁸

ここでは、性信が土湯山を巡り歩いている際に、「侍者」へ自身の前世遺骨が有ることを告げ、そこを掘って骨を得たという。そして、自身の前世遺骨発見を機縁に、この地に法得寺が建てられたという。遺骨譚自体は、余計

な描写がなくシンプルに描かれている。

また、③「性信上人縁起」と同時代に存在したものが、巡拝記の④『遺徳法輪集』である。『遺徳法輪集』巻五には、「性信上人縁起」と比べて、かなり描写が詳しい。全文引用は避けるが、要所を抜粋する。

サレハ建長二年ノ秋ノコロ性信房不思議ノ夢ヲ感セラレケリ、イツクトモシラス深山ニ歩ミ人ケルニ化僧一人キタリ告テイハク、コレハ奥州信夫郡土湯山トイフ処ナリ、御身カ先生ノ骨ハ即コノ松ノ下ニアリトイヘリ²⁹

右の『遺徳法輪集』では先述の①報恩寺所蔵「報恩寺開基性信上人伝記」と同じように、「化僧①では「聖僧」と表記」の夢告によって土湯山まで行く描写となっている。また、『遺徳法輪集』では続いて、

コレソ我先生ノ骨ノアリケル山ナラント西風東風(アチコチ)ト漂ユカル、ニケニモタカクツキタル塚アリ、松ノ古木枝ヲタレ根ワタカマリテ□蛇ノコトクナル印ノ植テアリ、夢ノウチノ体相ニイサ、カモ違トコロナシ³⁰とある。高く突き出た塚があり、そこに松の古い木枝が垂れて、根は、蛇がとぐろを巻いているように曲がりくねった形状であったという。そして、のち獵師との対話場面が詳細に描かれる流れとなっている。この、「根ワタカマリテ□蛇ノコトクナル印(蛇のようにとぐろを巻いた根)」という「蛇」の描写は、『遺徳法輪集』でのみ語られている。

少し時代が進み、⑤『大谷遺跡録』、⑥『大谷本願寺通紀』の記述には、特に目立った描写はなく、③板倉町・宝福寺所蔵「性信上人縁起」と似て、シンプルにその内容が記してある。

これが、江戸時代後期に出版された図会入り巡拝記⑦『二十四輩順拝図会』になると、「就中其德行比類なくして種々の奇特多かりける³¹」と、性信自身の徳の高さに比類がないから奇瑞が多いことが述べられてから、遺骨譚が始まる。また、多くの史料で語られる獵師との対話場面が無く、自ら塚にある松を掘って骨を得る。性信自ら掘って骨を得る描写は、③板倉町・宝福寺所蔵「性信上人縁起」と同様である。

以上、性信の遺骨譚について、成立年時にしたがって検討した。史料によって、遺骨譚の描写に若干の違いがみられる。まず、性信が土湯山へ行く動機は、

(1) 修行の志あるいは遊行 (①、③)

(2) 夢告 (②、④、⑤、⑥、⑦)

の二つに類型できる。夢告を動機とする場合が圧倒的に多いが、一方で、巡拝の道中に土湯山へ行く場合がある。次に、性信が土湯山へたどり着いたのち、「獵師」と遭遇するかどうかについて、若干の違いがみられる。

(1) 獵師と遭遇し、獵師に掘ってもらう (①、②、④)

(2) 獵師と遭遇せず、自ら掘って骨を得る (③、⑦)

(3) 描写無し (⑤、⑥)

獵師と遭遇した場合、性信の徳の高さを獵師が感じ取り、獵師自ら土を掘る描写となっている。獵師と遭遇しない場合は、性信自ら掘るのだが、獵師との描写を省略して記されているとも考えられる。

このように、描写に若干の相違はあるが、物語の概要に大きな違いは見られない。近世において、性信前世の遺骨を発見するという物語が明確に語り継がれている。

四、遺骨譚の考察

日本における遺骨の歴史は、時代によって差異はあれども、決して無意味なものとして扱っていない。釈尊の遺骨である「仏舍利」をはじめ、他宗教においても、遺骨というものは特別な遺物として認知されてきた。

特に真宗史では、親鸞という特定人物の遺骨に対して、安置当初から崇敬の念をもって扱われてきた傾向が非常

に強い。親鸞が示寂して十年後の文永九（一二二二）年、娘の覚信尼は、諸国の門弟の協力を得て、遺骨を吉水の北辺に改葬し、「大谷廟堂」を建て、親鸞の影像を安置する。この大谷廟堂が、本願寺の前身である。大谷廟堂が建立された当初、参詣者は絶えることがなかった。大谷廟堂の参詣について、のちの留守職（廟堂の管理者）である覚如（一二七〇～一三五二）が記したと言われる『報恩講私記』には、

境関千里の雲を凌ぎて奥州より歩みを選び、隴道万程の日を送りて諸国より群詣す。廟堂に跪きて涙を拭ひ、遺骨を拜して腸を断つ。入滅年はるかなりといへども、往詣挙りていまだ絶えず。³²

と、東国まで及ぶ諸国の人々が遠路苦難の旅を顧みず上洛し、命がけて親鸞の遺骨に参詣していることが記されている。大谷廟堂が建立されてからのち、永仁三（一二九五）年には、親鸞の木像が安置され「大谷影堂」となる。それから七年後の正安四（一二三〇）年から延慶二（一二三〇）年までのあいだ、唯善（一二五三～一三二七）を中心とする「留守職就任問題」が起こる。次期留守職が唯善ではなく、覚如に決定すると、唯善は大谷影堂を破壊し、親鸞の遺骨と像を奪って鎌倉に移ったという。その様子については、『常楽臺主老衲一期記（存覚一期記）』に、
唯公関東没落の刻、御影・御骨を取り奉り、鎌倉の常葉に安置奉る。田舎の人々、彼の所に群集すと云々。³³

とあり、唯善によって親鸞の骨・像が鎌倉へ移動され、人々も鎌倉に群れ集まるようになっていく様子が伝えられている。そうだとすると、当時の参詣者は親鸞の遺骨に会うことを目的としていた面が強くなる。室町時代以降になつても、遺骨を崇拜する傾向は続く。例えば蓮如の門弟記録である『金森日記跋』には、参詣者が親鸞遺骨や宗主寿像に興味を持つ交渉が記されている。³⁴

このように、親鸞示寂以降、参詣者にとつて、親鸞の遺骨は変わらず聖なる遺物として扱われてきた傾向がある。換言すれば、特定の宗教者の遺骨が特別視されていた時代といえよう。

これが、近世へと向かうにつれて、特定の宗教者に限らず、ひろく一般に遺骨そのものが注目されるようになって

ていくと言われている。これについては、佐藤弘夫が指摘するところである³⁵。その内容によると、死者は檀那寺（所属寺）の境内にある墓地に埋葬され、法名の刻まれた石塔が建立される。これにより、死者の存在が永続的に記録されることとなる。この状況の変化により、遺族による定期的な墓参りの習慣が確立し、それに即して、墓寺が増え始める。こうして、骨が納められた墓には先祖が眠り、墓参すればいつでも故人に会うことができる、現代人に受け継がれる感覚がしだいに社会に定着していくという。また、近世以前（中世中期頃まで）は、民衆の遺骨（火葬骨）は霊場や共同墓地まで運ばれ、合葬墓に埋葬されていたので、自分の先祖が、正確にどこに埋葬されているか判断がつかなかったという。換言すれば、納骨場所が特定できるのは、身分の高い一部の者となる。しかし、中世後期以降になると、墓は合葬墓ではなくなり、寺院の境内に個々の墓地が形成されるようになることによって、身分の低い者も先祖の納骨場所を特定できるようになったという。すなわち、民衆のあいだでも、故人の遺骨が身近な存在となってくるのである。

つまり、これまでのある特定の宗教者（親鸞）の遺骨に限って注目する時代から、ある特定の人物に限らず、あらゆる故人の遺骨が身近な存在として定着する時代に變化していったということである。

こうした思想史上の見解に鑑みて、近世の人々の心情には、とりわけ遺骨を大切にする傾向が強かったと考えられる。そうであるならば、近世東国の土湯山法得寺縁起として語られる性信の遺骨譚は、「遺骨を扱う物語」という意味で、当時の旅人にとって興味を持ちやすい話題だったのではないだろうか。

また、遺骨譚を語る表現に注目してみると、性信の遺骨譚が最も詳細に記されている『遺徳法輪集』には、遺骨が埋まっている木の根は、「蛇」のようであったと記してある。この「蛇」という表現は、近世の民話には頻出する常套句であり、多種多様な象徴的存在として表現されているものとして知られている。真宗寺院においても、花見ヶ岡・蓮華寺（現在の栃木県）や、坂東・報恩寺（現在の茨城県）の縁起で説かれる「親鸞大蛇濟度譚」がある。

親鸞大蛇濟度譚では、特に「執着心の象徴」として「蛇」が登場するのだが、一般的な民話においても「蛇」は執着心の象徴として登場することが多かったようである。⁽³⁶⁾ このように、近世の時代に生まれた様々な民間伝承において語られていた常套句が、複雑に絡み合い、話が増減していることが考えられる。

以上のことから、土湯山法得寺をとりまく念仏者（プロデューサー）は、遺骨を大切にする近世の人々（ゲスト）の心情に沿う話材で、また民間伝承で語られる常套句を織り交ぜることで、性信の遺骨譚を語っていたことが考えられるのである。

加えて、報恩寺所蔵「報恩寺開基性信上人伝記」下巻第四段では、巡拝にきた僧侶が、性信の遺骨の現物を見て感動する場面が描かれている。

享保十七年壬子ノ春、報恩寺ノ旧儀トシテ、予宗祖ノ尊像宝物等ヲ供奉シ、洛ニイタリ、今ノ東門真如尊師ノ
 拝覧ニヲヨブ、トキニ性信上人遺骨ヲミタマヒ、予ニ命ゼラレシニ、性信二世ノ骨ナリトコタヘタテマツル、
 ソノトキ忝

真如尊師マサシク嘆ジテノタマハク、嗟呼、性信モ権者ナリト、云云、

コレヨリ衆以テマスマス尊重喝仰セリ、凡そ性信上人一代ノ徳業、何ゾ筆端ニツクスベケンヤ、因ソノ要を摘
 デ、イサ、カコレヲ録スルトコロナリ⁽³⁷⁾

享保十七（一七三二）年の春、報恩寺の古来より受け継がれる儀礼として、親鸞の像や霊宝などとともに京都へ訪れたという。そこで、東門真如尊師という僧侶が、性信の遺骨を見て「嗟呼、性信モ権者ナリト」と、性信が権者（仏菩薩が衆生を救うために仮の姿で現れたもの）であると讃嘆している。これを受けて、人々は一層性信を尊敬し、その人徳は文字では伝えきれないほど素晴らしいものだとして述べている。つまり、性信の前世と現世の二世遺骨を現物として実際に見せることで、性信の徳を表現し、それを聞いた者が感動し、また他の人々へ広まっていく有様を

表している内容となっている。

『遺徳法輪集』の題辞には、

吾曾念言千聞不_レ如_二一見_一⁽³⁸⁾

と述べている。寺院にまつわる伝承だけでなく、その現物を寺宝として実際に見ていく経験が、当時の巡拝において重要な要素だったことが考えられる。

おわりに

以上、本研究にて、近世東国二十四輩寺院とりわけ奥州土湯山法得寺（ホスト）を取り巻く念仏者（プロデューサー）の語る性信遺骨物語を研究対象とし、その伝承が当時の旅人（ゲスト）にとつてどのような影響を及ぼしているか、「宗教ツーリズム」の視点に導かれながら考察した。これまで歴史学の見地のみでしか扱われなかった性信の遺骨譚は、過去の真宗伝道の実践事例であることが明らかとなった。

近世に説かれた性信の前世遺骨譚は、遺骨文化の流行という当時の旅人の心情に沿うかたちで描かれている。また、物語の描写の節々には、「夢告」や「化僧」という神秘的な奇瑞が表現され、史料によつては「蛇」などの当時の人々が関心を持つ常套句を駆使して表現している。加えて、遺骨の現物を見せることで、当時の旅人に強く印象を与えたことが窺える。

遺骨にまつわる伝承を機縁として集まった人全てがそこから真宗に出会うわけではないだろうが、そこで念仏者が重ねて法を説くことで、その中に真宗と出遇う者が居ることもまた容易に推察されるところである。謂わば当時の定番の布教伝道のスタイルとして、実践されてきたのであろう。すなわち、その時代の社会や人々に沿う伝道形

式が行われていたということである。

なお、性信の前世と現世の二世遺骨は、東京都台東区・報恩寺の寺宝として現存している。遺骨の現物が現在まで残っていることは、この遺骨が寺院関係者の重要なものとして語り継がれて来た一つの証拠であり、その伝承が一定の意義を持つものであったことを示しているともいえよう。

【註】

(1) 宗教学や宗教社会学では、「観光」という語と「ツーリズム」という語とを区別する。ツーリズム (tourism) の語源はラテン語で「ろくろ」を表す *torvus* とされており、諸国を巡回旅行する意味だという。日本においては幕末に入ってきたこの *tourism* (*tourism*) という言葉に対して、訳語としてあてられたのが「観光」である。ちなみに観光の語源は『易経』の「観国之光(国の光を観ず)」からきている。つまりその国の優れた景観・文化などをみせることに基づく。こうした両者の語義については、中尾清氏・浦達雄氏編『観光学入門』(晃洋書房、二〇〇六) に詳しい。なお、先述の通り、「ツーリズム」と「観光」との両者は厳密には同義語ではないが、本研究では同義語として扱うことにする。

(2) 「宗教ツーリズム」という用語が使われたのは、一九九二年、ドイツのリンシードによる「religious tourism」が嚆矢である。リンシードは、ツーリズム(観光)の影響が宗教の領域にも深く浸透しているのではないかという問題意識から、「宗教ツーリズム」とは、その参加者が部分的ないし全面的に宗教的理由に動機づけられているツーリズムの類型」と定義する。山中弘編『宗教とツーリズム―聖なるものの変容と持続―』(世界思想社、二〇二二) に詳しい。

(3) 岡本亮輔『聖地巡礼』(中公新書、二〇一五)

(4) 門田岳久『巡礼ツーリズムの民俗誌―消費される宗教経験』(森話社、二〇一三)

(5) 門田岳久、前掲『巡礼ツーリズムの民俗誌―消費される宗教経験』。

(6) 山中弘編、前掲『宗教とツーリズム―聖なるものの変容と持続―』。

(7) 以下、本研究で用いる「念仏者」とは、「仏願の生起本末を聞信した念仏者」と定義する。他力信心をえて阿弥陀如来の慈悲を讃嘆する者のことを意味する。

(8) 基本的に、東国における親鸞の有力門弟、あるいはそのゆかりの寺院を二十四輩という。

- (9) 伝承とは、人々のあいだで古くから伝わる信仰や習俗などを承けて、後世へ伝えていくことである。伝承文学、口承文学などとも言われる。小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 第二版』（小学館、二〇〇二）や、柳田邦男監修『民俗学辞典』（東京堂出版、一九五一）に詳しい。
- (10) 塩谷菊美『語られた親鸞』（法藏館、二〇一一）
- (11) 草野顕之『親鸞伝の史実と伝承』（『龍谷史壇』一三七、二〇一三）
- (12) 大澤純子『親鸞像の形成と展開過程』（近日公開）
- (13) 末木文美士『親鸞』（ミネルヴァ書房、二〇一六）
- (14) これは、談義本が研究対象となりにくい研究史とも重なる。関山和夫『説教の歴史的研究』（法藏館、一九七三）一頁にそのことが述べられている。
- (15) 今井雅晴『親鸞の伝承と史実―関東に伝わる聖人像―』（法藏館、二〇一四）など、多数。他に、塩谷菊美氏も『東国』の親鸞の発見』という枠組みで考察をしている（塩谷、前掲『語られた親鸞』）。
- (16) 二十四輩寺院に関する巡拝記の出版状況を整理すると、一六〇〇年代以前に断片的な記録として存在するのが最も古い史料になるが、それ以降、二十四輩寺院を挙げて解説し所蔵宝物の品目を連ねた、いわゆる巡拝記の体裁となり、近世中期の真宗僧侶宗誓（一六四五～一七一八）が著した『親鸞聖人御直弟散在記』と『二十四輩散在記』の集大成となる『遺徳法輪集』が、真宗巡拝記の初期代表作といえる。この『遺徳法輪集』などに基づき著したのが、先啓の『大谷遺跡録』である。これは、著者が生涯をかけて著したものであり、当時の遺跡研究の集大成といえる。
- (17) 『真宗史料集成』八（同朋舎、二〇〇三）四五四頁
- (18) 『浄土真宗聖典全書』二（宗祖編）「解説」（七三八頁）に詳しい。
- (19) 柏原・蘭田・平松『真宗人名辞典』（法藏館、一九九九）一七三頁
- (20) 今井雅晴『性信房関係史料』（茨城大学人文学部紀要人文学科論集）一九、一九八六）参照。書名は、論文中の名称をそのまま用いた。書物の順番は、年代順ではなく、今井雅晴氏の論文に出てくる順番にならった。
- (21) 今井雅晴、前掲『性信房関係史料』
- (22) 『真宗史料集成』八（同朋舎、二〇〇三）六三八頁
- (23) この情報については、のちに刊行した近世巡拝記の『遺徳法輪集』の情報も筆者が加えている。
- (24) 前に記した、当時でいう下野国小山荘佐河にある法得寺。

- (25) 「塵壺(じんこ)」とは、江戸時代の紙くずかごのこと。
- (26) 今井雅晴、前掲「性信房関係史料」六二～六三頁
- (27) 今井雅晴、前掲「性信房関係史料」四九頁
- (28) 今井雅晴、前掲「性信房関係史料」五六頁
- (29) 『真宗史料集成』八(同朋舎、二〇〇三) 六三七頁
- (30) 『真宗史料集成』八(同朋舎、二〇〇三) 六三七頁
- (31) 『真宗史料集成』八(同朋舎、二〇〇三) 八四六頁
- (32) 『浄土真宗聖典全書』四(本願寺出版社、二〇一六) 六八頁、原漢文。
- (33) 『浄土真宗聖典全書』四(本願寺出版社、二〇一六) 一四〇七～一四〇八頁、原漢文。
- (34) 『真宗史料集成』二(同朋舎、二〇〇三) 七〇三頁
- (35) 佐藤弘夫氏によると、古代・中世・近世、それぞれ死者や靈魂をめぐる観念が異なり、以下の変容がみられるという。
- 古代・遺骸や遺骨を放置し、それを顧みることはない
- 中世・火葬骨を霊場や共同墓地まで運ぶ
- 近世・家の墓を造って骨を納め、定期的に墓参を繰り返す
- (佐藤弘夫『死者のゆくえ』(二〇〇九、岩田書院)二〇四～二〇五頁)
- (36) 近藤良樹「昔話・神話にみる蛇の役柄―知恵・生命・異性の象徴となる蛇―」、『HABITUS』一六(二〇一七)に詳しく。
- (37) 今井雅晴、前掲「性信房関係史料」五一頁
- (38) 『真宗史料集成』八(同朋舎、二〇〇三) 五八七頁

【キーワード】

伝道 伝承 性信 二十四輩